

米中紛争

金融アナリスト
永山卓矢

— 裏と表の熾烈な駆け引き —

【難しい立場に立たされた中国】

米国が中国に対して再び圧力を強めている。北朝鮮に拉致されて昏睡状態に陥っていた米国人の大学生が帰国した直後に死亡した事で米国内で反感が高まったのを背景に、トランプ大統領は以前にはツイッターで“おだて殺し”にしていた習近平国家主席を非難する姿勢に転じた。

しかも、帰国した時期が6月21日に開催された米中外交・安全保障対話の直前であり、案の定、協議では米国側は北朝鮮に対して一段と圧力を強めるように要求したのに対し、中国側が難色を示した事で物別れに終わった。これを受けて、米財務省は29日に北朝鮮との不正金融取引に関わったとして、「セカンダリー・サンクション（二次的制裁）」の原則を適用して中国籍の丹東銀行を米金融システムから遮断する事を発表した。

これまで、北朝鮮は何度となくミサイルを発射してきたが、それでも米国は核実験を再び行ったり、大陸間弾道ミサイル（ICBM）の発射を“レッドゾーン”として、この一線を越えると軍事的な対応を取ると表明してきた。

ところが、北朝鮮は今月4日に発射したミサイルについて、ICBMの発射実験に成功した事を正式に発表した。さしあたり、米国は今すぐに軍事的な対応を取らない姿勢を示しているが、中国が難しい立場に立たされたのは間違いない。

【脅されて相手の懐で首脳会談に臨む】

これまで本誌で述べてきたように、欧州ロスチャイルド財閥は以前、習主席が提唱している「一帯一路」構想に相乗りしてユーラシア大陸に巨大な経済圏を構築する事を目指したが、中国が天文学的な債務を抱えている事が明らかになった事で、ひとまず米ロックフェラー財閥と提携した経緯がある。人民元相場を崩落させていき、通商問題や特に資本取引の自由化を受け入れさせる事で、国有銀行や代表的な国有企業を次々に買収して中国そのものを“乗っ取った”上で、ユーラシア経済圏の構築に向けて動くというものだ。

保護主義的な性格が強く、負債を抱えて金融機関に対して身動きがとれないトランプ大統領が擁立されたのはこのためだ。実際にトランプ大統領は選挙戦中から中国製品の輸入に45%の関税をかける事を提唱したり、台湾との関係を巡り「一つの中国」の原則に縛られない姿勢を示した。さらに北朝鮮問題をも利用し、軍事攻撃の可能性をちらつかせながら、同国に対して原油の供給を停止もしくは抜本的に削減する事で圧力を強めるように要求した。いうまでもなく、中国としては北朝鮮の現体制を絶対に崩壊させるわけにいかない事を承知の上でそうした強要をしたわけだ。その上で、水面下で通商問題や、特に資本取引の自由化に向けて大幅に譲歩するように要求したのである。

こうした米国側の要求に対し、中国側は表向き平静を装ったものの、内実は非常に警戒し動揺したのはいうまでもない事だ。米国の親イスラエル右派や共和党系新保守主義（ネオコン）派に操られている朝鮮人民軍が主導権を握っている北朝鮮が頻繁にミサイルを発射し、それに応じて米軍も航空母艦を日本海に派遣して演習活動をするといった“ヤラセ”を演じて中国側を“脅す”行為に出た。さらに高関税を課されて米国への輸出が激減すれば、中国経済そのものが崩壊しかねなかったのだから当然である。

4月6～7日に米フロリダ州のトランプ大統領の別荘で米中首脳会談が行われた背景には、こうした事情があった。米国側から受け入れ難い要求をされるのがわかっているが、それでも習主席が「相手の懐」に出向いて会談を行わざるを得なかったのはこのためだ。

ただその際に、中国側が会談を求めざるを得なくなる最大の決め手になったのが、米国務省が北朝鮮と取引がある多くの国有銀行を「制裁リスト」に載せ、米金融システムから排除する姿勢を見せて牽制した事だったという。それをされると中国の対象銀行は国際金融取引面でドル資金を調達できなくなってしまい、代わりに政府が供給しなければ資金繰りが麻痺して破綻せざるを得なくなるからだ。

首脳会談の最中にも米軍がシリアに巡航ミサイル攻撃に踏み切ったことが報告されるなど脅された挙句、100日をメドに貿易不均衡の是正を目指す計画を練ることが決まった。それを機に、トランプ大統領も北朝鮮問題で習主席を“おだて殺し”にしながら、水面下での通商・自由化交渉で圧力をかける姿勢に転じた。それにより、100日も経たずに5月14日の習主席が主催した「一帯一路」国際会議の開催に間に合わせる形で、11日に両国の合意内容が公表された。そこでは、中国側が米国産牛肉の輸入開始や液化天然ガス（LNG）の輸入への配慮以外に、金融分野では中国国内での格付け業務や米金融機関による債券の引き受けや決済業務の参入を認めるなど、欧州系財閥が関心を寄せる分野も盛り込まれた。それを受けて、米国側も国際会議に日本とともに代表団を送るなど、その時点までは米中両国の関係が比較的良好に推移してきた。

【“おだて殺し”をやめて再び強硬姿勢に】

しかし、その後中国側は資本取引のさらなる自由化を明確に拒絶する姿勢に転じていった。中国では国有、民間を問わず多くの企業が薄外で巨額な対外債務を抱えているため、これ以上の人民元相場の崩落をなんとしても阻止しなければならないからだ。そこで資本流出に強力な規制をかけるだけでなく、最近では人民元相場の値動き自体も人民銀行が厳格に管理するようになっている。6月13～14日のFOMCで、FRBが利上げを決めるだけでなく、来年も今年と同じペースで利上げを推進する姿勢を示した。さらには年内に資産の縮小を開始してそれ以降のスケジュールまで発表し、それを経済情勢に関わらずに「機械的」に進めていく事を実質的に「宣言」した事で、中国側が脅威に感じてよけいに態度を硬化させたのはいうまでもない事だ。

その背景には、一つは今秋の中国での共産党大会の開催を控えて、米国側では米系財閥も欧州系財閥も、また軍需産業系も習主席が専制権力体制を確立してその永続化が実現される事を望んでいる中で、そのために導入された安定化策を強硬に反対することはできないといった“読み”が中国側にあるのだろう。またもう一つは、米軍需産業系や親イスラエル右派、共和党系ネオコン派としては、極東で繰り広げるのはあくまでも「冷戦」に過ぎず、「熱戦」は中東で引き起こそうとしている中で、北朝鮮を牽制するために日本海に展開していた航空母艦の多くが今ではイランを封鎖するためにペルシャ湾に向かった事もあると思われる。米国と北朝鮮の軍事的な対立が遠のいており、中国としてはもはやそれほど圧力を受けていないからだ。

そこで米国側は軍事的な圧力をかけられなくなった代わりに、冒頭で述べたような対応に出ているわけである。今回は最も北朝鮮との取引が多い丹東銀行を標的に米金融システムから遮断する措置に出たが、中国側が人民元相場の市場化に向けた動きや資本取引の自由化に取り組まなければ、これを他の中国の銀行に拡大していき、場合によっては四大銀行ですらその例外ではないとして脅しをかけているようだ。さらに今回、北朝鮮にミサイルを発射させて I C B M の発射実験に成功したなどと表明させる事で、一段と中国側に圧力をかけている。今後、両大国間の紙上には決して載らない水面下での交渉や駆け引きから今まで以上に目が離せない展開が続くそうだ。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

下げても上げて買い

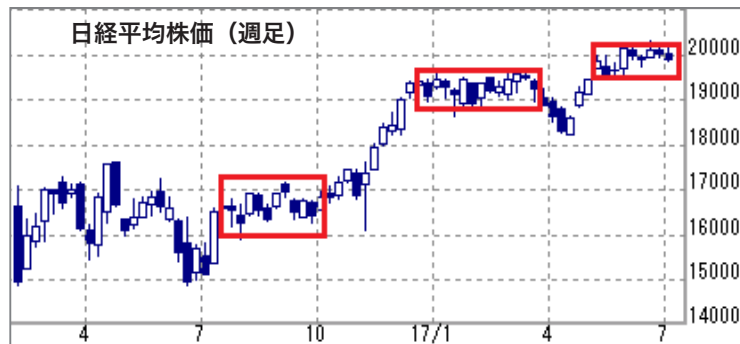
日経平均株価は2万円を挟んで重苦しい展開が9週ほど続いている。下げるでもなく、上げるでもなく、ほとんど横ばいで推移。参加者は嫌気がさしてくるころであろう。

振り返れば昨年末、1万9千円台まで上伸した後、やはり12週間程停滞した。そしてこの時は保合いを下放れれば5週間下げ、4月17日にボトムを付けた。昨年8～9月はその逆。今回は4週ほど上昇してから保合いに入った。この1年間の相場はこういった特性を持つ波動構成なのかもしれない。ただ前回も述べた如く、この保合いは上放れを観ている。即ち「今回は1年サイクルが4月にボトムを打ってまだ3カ月もたっていない。従ってトレンド中段のウエッジと予想する」。1年サイクルのハーフサイクルが半年、さらにそのハーフサイクルなら3カ月。メリマンサイクルを適用するならプライマリーサイクル(PC)の半分が7～11週ハーフPC。間もなくこのサイクルが終了する時間帯である。

結論としては1年サイクルはまだ若いので、依然として上昇を想定。保合いエネルギーを貯めるほどに次の上抜けは爆発的

になってもおかしくない。そのターゲットとしては、6月19日号のコメントを適用すれば次の通り「しかし今後2万円前後で何度か苦闘しながら5月のギャップがサポートされていれば、その苦闘分が次の爆発的なエネルギーに転換され、一気に次の目標22,750までもっていく可能性を秘めている。上述の一段上げ、二段上げと値幅を等比級数的に伸ばせば三段上げでは22,890となる」。今週20,300以上で引けて来ればそのトリガーになろう。

全ての押し目は買いで対処したいが、押し目なく上放れは追撃買い。



今週の押し

多分ダイバージェンス

ユーロドル相場に関してが先週こう述べた“(相場は)2015年8月と昨年5月の高値を結んだトレンドラインを上回る寸前まで来ている。この水準を超えると2015年春から続いた長期保合いトレンドが解消する。…1月安値に起因する上昇チャネルラインの上限(現在1.1150付近)が少なくとも強力なサポートラインである事は判った。…(ただ)どんなに上がったもここからの買いは危険である。更に15週スローストキャスティクスは「弱気オシレーターダイバージェンス」発生の可能性が。これは急落を示唆するシグナル。従って、今週は1.1500以上の引け値にストップロスを入れて目先の高値は売り、1.1150で利食いたい”。先週の相場は2015～16年高値をトレンドラインを突破出来ず、改めて非常に強力な上値抵抗である事は判った。恐らく近日中に突破すると思われるが、それは今ではない。何故なら買いの日柄は既に満ちかけているからだ。

以前から当欄で指摘しているが、2015年3月13日の安値から38週、29週、28週とボトムが出現。上昇も起点から24週、22週しか続かなかった。6月29日の高値は1月3日の安値から25週経過しており、目先の上昇には限界がある。

加えて、チャートパターンの5月23日の1.1266をポイント1として、現在高値切り上がり、安値切り下がり波形が5ポイント目に入っている。今週6月29日の高値を上回る可能性は否定できないが、そうなった場合「ロールソー5ポイントリバーサル」と呼ばれる天井形成パターンになる可能性がある。

また、6月高値を上回ると、恐らく先週も指摘した弱気オシレーターダイバージェンスが発生する可能性がより高まる。従って今週も1.1500以上の引け値にストップロスを入れて売り参入を推奨していきたい。仮に6月高値が目先の天井であった場合、通常はボトムまで2～5週間の下落が想定される。早くても今週、遅くとも8月第1週までに1.1500、オーバーシュートで1.1000までの下落があるのではないかと。そこは恐らく格好の買い場になるものと予測する。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円(税込み)



今週の相場風林語録

誰もがじっとしておれないときの危険【2】

誰もが、じっとしておれない時が多い。ひとりでじっとしているのは非常に難しく、また、つらいものがあるが、その行く先を冷静に考えれば軽率に動かない。

今週の九星★波動

三碧木星らしい展開

南雲 紫蘭

「5月に売ってどこかに行け」という格言をまるで小馬鹿にしているかのように、相場は株高、長期金利上昇、ドル円のドル高、と同時にユーロもしっかりとなっています。

一時の長期金利の下落もまるでなかったような値動きとなっていますが、その値動きはまるであまりにも政治リスクに偏重しすぎてしまったマーケット参加者を、あたかもせせら笑っているように思えるのは気のせいでしょうか。

冷静に考えて、金融政策の差と考えれば、この動きもおかしきはないのですが、マーケット参加者が考えているような金融政策の方向性はかなり食い違っており、金融政策上は米国が一番強く、その次が緩和から引締めに転換する欧州と考えれば、金融政策が微動だにしないであろう本邦はやはりユーロに対しても米ドルに対しても下落すると考えられます。

月盤が7月から《三碧木星》に入った九星高下伝も、現在の

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (402)

中原 駿

上野の戦略は、長期債の保有目的を「長期投資」ということにして時価評価から免れた。

一方で、短期債の空売りポジションは、トレーディング勘定とし時価評価を行った。

本社から見れば、長期保有目的のポジション一、つまり簿価でもてるポジションは全体の50%以下というルールを作っていたが、上野のように長期債を50%持ち、短期債の空売りを50%持てばルール上の問題はなくなるのであった。

つまり実際には、上野のポジションはカーブプレイといわれる長期金利と短期金利のリスクをとっていたのだが、対管理上はリスクなし、とすることが出来るのであった。



円独歩安基調続く

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ユーロ円の上昇率際立つ

ただひたすらに目標に向かって突き進む。この数週間のドル円相場に関してはそう言えるだろう。

過去3週間のコメントを繰り返す「ドル円相場は当欄、強気で攻めているが、先週のテーマはサブサイクル上昇期。数週間で3～5円幅、最大で7円幅の上昇を見込んでいる……うまく上昇軌道に乗れば、途中、113円前後、115円前後、それぞれ一部利食い。その後の押し目をまた買い直すのも良い。…利食いした投資家は高値から1～2円の調整は買い直しておく。少なくとも次の目標は前回述べた如く、7月中旬に5月高値114.36更新を目論む」。

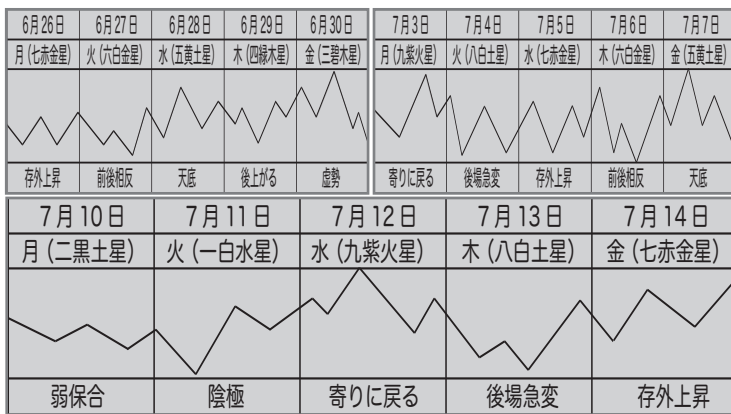
何度か利食いも入っているが、買い直しも効いている。7～11週サブサイクルの上昇期はまだ継続されると見る。今週は4週目。少なくとも5～7週目まで、上昇トレンドが継続されると観ている。これが実現されれば、5月高値更新は容易であろう。

先週次の通り述べた「通常のケースではユーロドルに対して、ドル円は逆相関になるケースが多い。ところが今回はドル円上昇、ユーロドル、ユーロ円も上昇。即ちこれは円の独歩安を示す」。この流れはまだ続いているようだ。ユーロ最強、円最弱ではユーロ円の上昇が際立つ。

実際、6月安値からドル円はここまで4.59%の上昇率に対して、ユーロ円は6.24%、ユーロドルは3.0%。ユーロドル

ところ《三碧木星》らしい急激なドル高、株高となっています。

大きく年足でも年中央の反転が期待されていますので、その意味では押し目買い。しかしながら《三碧木星》は「一気に加速して急落する」、つまり虚勢となりがちな事は注意が必要です。



結果、上野のポジションは実際のリスク寄りにはるかに小さく評価された。

短期債券の価格は、政策金利の動向で左右されるので、グリーンズパン議長が連続利上げをしているうちは、短期債の価格は値下がりし、上野は評価益を得ることが出来た。

さらに長期保有目的とされる長期債ポジションも、時価評価は本来かなり値下がりしているのだったが、時価評価しないので、下落によるロスは見えない形になっていた。

長期債券を調達するために1～3カ月物を調達していたのだが、この調達ポジションと長期債との金利差による利益は上野のマナーポジションとして利益となっていた。

上野は、このようにしてまだ欠陥だらけのリスク管理の中で大きな利益を得ていたのだった。

が1.15～1.6を超えてくれば底練り脱出。数年間の上昇が始まろう。少なくとも1.30以上はある。ユーロ円は150円以上が目標となる。この構図はクロス円の売りに勢いが出て円最弱の状態が続ぎ、ドル円も地味ではある上昇傾向を辿るのだろう。これがユーロドルとドル円の両長期サイクルが上昇期に入っているという証になる。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第47回】日経平均株価のサイクルについて (6)

通常、1つのサイクルは2つのハーフサイクルで2分割されるか、3つのサブサイクルで3分割されるのが基本。昨年9月、この相場の長期相場サイクルは「17～18年」と許容範囲が広く、このサイクルが(9年)ハーフサイクルで2分割、更にこのハーフサイクルは3年サイクルで3分割されると見ていました。

ただ現在、長期サイクルが「17年」「8.33年(89～111カ月)」と範囲が狭まって別の見方が出現。それが4年サイクル。即ち8.33年サイクルのハーフサイクルという見方です。6月のMMAサイクルズレポートでは、 48 ± 11 カ月(37～59カ月)のレンジを有するサイクルとして定義付けられた上でこう述べられています“1950年以降の相場で確認された4年サイクルは総計16回。そのうち13回のケースで見られた起点から天井までの反騰期間は18～57カ月となっている。更にこの「上昇期間57カ月」のケースを除外しても、これまで16回確認された4年サイクルの内12回(75%)で、起点から18～49カ月目のトップアウトが確認されている。また、この12回の内2回が起点から18カ月目でトップアウトしており、この2回を除く

と、残り10回の4年サイクルでは起点から31～49カ月目でトップアウトしていた事が判った(これは全体の62.5%にあたる)”。

現行17年サイクルの起点である2008年10月28日の6,994円から2011年11月25日の8,135円まで37カ月。更にこの11年11月安値から昨年6月24日の安値までは55カ月。従ってこれは、昨年6月までに4年サイクル2つで第一8.33年サイクルがボトムをつけたという事を意味します。

従って、現行4年サイクルに内包するサブサイクルの天井から下落する可能性はあるものの、中長期に見てそこは買い場であり、押し目買いであるという見方が出来るのです。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

7月20日からの1週間に注意

先週、日本時間7月5日のホロスコープを掲載。これは6月25日～7月20日までの太陽、火星、木星、天王星、冥王星のカードィナルグランドクロスの中間点付近であったが、日経平均株価が4日、NY原油が(米国時間)5日に週の高値をつけて下落していった点は興味深い。

このグランドクロスに関連して、先週は次の通り述べた“太陽は日本時間で(6月)21日に蟹座にサインチェンジした(夏至)。火星は7月20日に蟹座から獅子座にサインチェンジする。夏至付近で日経平均株価が年初来高値をつけ、先週末はギャップダウンしたので、このグランドクロスが相場、特に株式相場に関係するのなら、前週、先週の高値を目先の節目とする日経平均は、今月末まで下げ基調が続くかもしれない。…加速や相場反転のどちらであっても、今月下旬が次の節目となる公算が高いと星回りから見て取れる”。恐らく次の節目を迎える時間帯は7月20日からの1週間前後ではないかと筆者は見る。

7月20日に火星がサインチェンジする話は既に書いたが、その後22日(日本時間では23日)に太陽も獅子座にサインチェンジ。23日は新月。24日には金星・土星オポジション(180度)。そして27日には太陽・火星コンジャンクション(0度)が発生する。これはメリマンCDや各種MMAレポート等で最近採り上げられているが前後6週間の時間帯で株式相場の高値と合致しやすい。これは前回のコンジャンクションが2015年6月14～15日に発生し、その際日経平均は翌週に高値をつけて下落したものの、NYダウはこの天体位相を挟んで高値と2番天井をつけたからだ(週足を見ると下降直前のジェットコースターによく似ている)。従って株式はもう既に高値をつけたかも知れない。

もう1つ個人的に気になるのは、7月28日～8月7日にかけて太陽中心のホロスコープで見た射手座内に水星が入居する(ヘリオ射手座ファクター)。これはユーロや金相場の大きな上下変動の特異日であり、急騰の場合はファクター開始日から4営業日前までに大きな下落がある事が多いとメリマン氏は指摘している。存外、ユーロも金もこの時間帯まで下降局面が続くかもしれない。その場合、良い買い場になるのではないかと。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 7月10日(月) 腹8分目は取りすぎ、3分の利をもって良しとする
- 7月11日(火) 短期売買は欲をかかず、利乗れば直ちに手仕舞い
- 7月12日(水) レンジ内で推移する市場多々あり
- 7月13日(木) 保合い放れ寸前
- 7月14日(金) 重要変化日前後のオーブに入る(18日まで)
- 7月15日(土) 10回の損切り、7回悔やまれるも、3回は命拾い
- 7月16日(日) 7回利食い続けば、次の損失警戒せよ

ラジオNIKKEI メリマン氏最新インタビューCD

年後半の注目点となるか？ 8月の皆既日食

メリマン・スペシャルCD
メリマン2017後半大予測！

出演：レイモンド・メリマン 解説：林知久(投資日報社)

緊急発売

サイクル、テクニカル、そしてアストロロジーで種々の相場を分析予測し、その的中率の高さから世界中にフォロワーを持つMMA(メリマン・マーケット・アナリスト)主宰、レイモンド・メリマン氏。そのメリマン氏に、ラジオNIKKEI社は毎年2回、彼が年末に上梓する年間予測本「フォーキャスト」執筆直後の12月と、発行後半年経過した6月に電話取材を敢行し、それをもとにした音声コンテンツを製作されています。相場以外の話題といえば、やはりトランプ大統領の今後の動向になるのではないのでしょうか。彼は1946年6月14日、月食(太陽と月を結ぶ直線上に地球が入り込む時間)の時に生まれています。これに加え、彼の出生図からは独創的、カリスマ性のある、名声も悪名もどちらも獲得出来るキャラクターである、とメリマン氏は分析しました。氏は、混迷の大統領選でトランプ氏が勝利する可能性があるとして以前から指摘していた少数派の人でした。今年8月21日、全米で皆既日食が起こります。これは全米に、大統領に、そして相場にどんな影響を与えるのでしょうか。恐らくこの前後の時間帯は直近の注目ポイントになるのではないかと考えます。もちろん、このようなアストロロジーの話だけでなく、サイクル、テクニカルの観点も加えた日米株式、通貨(ドル円、ユーロドル)、金、原油、穀物の見通しについてもお聞きします。アストロロジーに興味の無い方にも「フォーキャスト」のサブテキストとして、メリマン理論入門篇としてお聴きください。

製作：ラジオNIKKEI 価格：6,480円(税・送料込)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ・投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版(株) 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444

FORECASTS 2017
レイモンド・メリマン著
林知久解説・投資日報編集部監修

ザ・グレートリセットとは？
星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

改めて読んで納得!!

フォーキャスト2017
アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日播香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ・投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版(株) 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444